

六甲ロゲイニング 2013年11月2日 兵庫県神戸市

決して天気はよくないものの、日中は曇りでもちそうだという予報の11月2日、関西の低山ハイキングの聖地六甲山でロゲイニング大会が行われた。

2013年11月2日(土) 兵庫県神戸市
六甲ロゲイニング



六甲カンツリーハウスには、200人近い参加者が集まった。多くは家族連れや若いグループだ。

賑わう六甲ロゲイニング

六甲といえばトレランがはやる前から縦走大会が行われ、毎年発表される山岳遭難統計でも近年道迷いを中心とした軽微な遭難が増えている。裏を返せば、それだけ市民に親しまれた気軽なハイキングエリアなのだ。晴れていれば神戸や瀬戸内海の眺めが、そして帰りの夕方には100万ドルの夜景が楽しめるはずだった。だが、会場であるカンツリーハウスに到着したところには、六甲山一帯は一面の霧に覆われた。

本大会を主催したのは、自然体験教育の分野では日本をリードするホールアース自然学校。静岡に本校を持つ同組織だが、六甲や沖縄にも支部校を持っている。沖縄では2009年に田島利佳と松澤俊行の両氏が講習を行って以来、毎年の恒例行事として定着している。この六甲も4回目の開催である。今回は、計測部分で、兵庫県オリエンテーリング協会がSIを使った支援をしていた。

オリエンテーリング界から特に注目を集めた訳でもないこのイベント。参加費も一人3000円と決して安くはない。しかも、曇り一時雨が予想されるこの日、いったい何人集まるのだろうか。興味津々で会場についてみると、山ボーイ・山ガール風の若いグループを中

心にざっと数えただけでも200人近い参加者が集まっていた。都市部であることは大きな理由だが、新聞その他を活用した集客力はさすがだ。



ポイントの中には六甲山の歴史を物語るものもある。最高得点100点のポイントはとと(魚)や道と呼ばれ、その昔瀬戸内海から内陸に魚を運んだルートで、そこに作られた六甲山最古のトンネルだ。

六甲の雨

会場となったカンツリーハウスは最高峰六甲山に近い東部にある。使用されたのは、西は摩耶山から北は有馬温泉まで、4時間のロゲイニングだが、エリアは意外と広い。ただし、山の険しさから、ポイントの多くは緩やかな稜線から急斜面が始まる上部に限られ、一部有馬温泉方面のみ山麓にまでチェックポイントが展開している。点数の分析をしてみると、六甲山東部が183点で、有馬温泉周辺が237点。西の摩耶山が271点であることを考えると、圧倒的に東部の得点が高い。また東部から回れば、融通の利く山稜線付近が残る。そう考えて、まずは東部の稜線部をつぶして有馬温泉に下降。使えるロープウェーで山頂に戻り、残り時間を見ながら稜線部のCPを攻めるというラフなプランを立てた。

開会式が終わり、スタート時刻の10分前の10:50に地図が配布され、さてプランを立てようとした時に、雨が降り出した。小雨というよりも、むしろ結構な雨模様だ。元々疲れ気味だった村越・田島ペアはこの時点でかなり戦意喪失していたと、後から振り返ると思えるのだが、一般参加者はビニール合羽などを出して、いっこうにひるむ様子もない。神戸におけるハイキング文化の深さを垣間見た瞬間だ。

天候のせいもあって、レース自体の印象はかなりネガティブだった。あら

ゆる条件でも戦う準備ができていなかった。大きな反省材料だ。前半6つ目のポイントとなるCP25の場所が200m以上ずれていたのも痛いのだが、急斜面にある尾根のCPを取り損ねたのが致命的だった。六甲は600m程度の里山だが、道迷い遭難が多い。道迷い遭難の多いのも納得だ。

こんな雨なのに、ロゲイニング以外にも多くのハイカーがいた。いい意味カルチャーショックだ。関西ではまだまだロゲイニング大会が少ないが、ナビゲーションスポーツが発展する余地は大きい。帰りのバスの中で隣になった女子チームの二人が「賞品何もらったんですか?」と、もらった袋の中を覗かんばかりに声をかけてきた。大阪・京都から来たその二人は、普段はトレランで、ロゲイニングは初めてらしかった。自然の中で地図を見ながら自由に走れることのおもしろさや重要性は感じたとのこと。

総合で最高得点を得たのが、朱雀OKが624点で圧勝だ。2位が私たち(541点)、3位が林夫妻のラタマキュー(510点)だった。ファミリーのチーム桜口523点も素晴らしい。



この日は、六甲ミーツ・アートというイベントが行われており、ポイントのいくつかはイベント会場に設置され、参加者は無料で入場することができた。写真はポイント14。背後にあるのは、世界三大がっかりで有名(?)なマーライオンと人魚姫とシオン弁小僧を合体させた彫刻だ。がっかりポーズを取る田島が、この日の気分をよく表している。

(村越 真)